

編集後記：いよいよ冬本番ですね。大学で私が担当している気象学の授業では、冒頭で最新の地上天気図、高層天気図を使って気象の解説をしています。今学期は今のところ、傾圧波がはっきりして大陸からの寒気の流入も分かりやすい日が多く、授業もやりやすいです。本学は教育学部ですので、理科を専門としない学生さんにも授業をする機会があるのですが、興味を持って聞いてくれているようです。「1024 hPaの高気圧の中心は1024 hPaなのだから、中心のまわりを1024 hPaの等圧線で囲んでしまったら、中心は1024 hPaよりも高いことになるからおかしいのでは？」と突っ込みを入れてくれたのは、たしか数学科の人でした。普段から言われなくても論理的に考える習慣がついているようです。

昨冬は、栃木県で冬山登山中の高校生が遭難する痛ましい事故がありました。最近になって事故検証委員会から報告書が出たようです。「対策」として、天気図の読み書きが重要と言いながら、載っている天気図は、事故発生時の地上天気図1枚を除くと、南岸低気圧型と、どう見ても典型的ではない自称「西高東低」型の2枚だけ。これでは困りますね。中学校の教科書

にも及びません。ネットで公開されているので、関心のある諸氏はぜひご一読を。

最近の教員養成業界で流行っている考え方、それは「あとは教え方の問題」。理科に限ったことではありませんが、教えるべき教科の内容をより深く学んでおこうという発想はとっくの昔にどこかに行ってしまったようです。教職大学院（法科大学院の教育版）はその最たるものでしょうか。

話を気象学の授業に戻しましょう。理科生向けの専門の気象学、レベルが高いにもかかわらず、今学期は数学科や社会科の学生さんも何人か履修しているようです。スケールハイトや温位の導出もありますので、高校時代に文系クラスだった人は悪戦苦闘のようですが、それでもがんばってついてきてくれています。若い人たちはまだまだ捨てたものではないようです。あとは教え方の問題、そんなことを言っているのは「有識者」の先生方だけ。たぶん、そうなのでしょう。もっと多くの先生が理科や学問そのものを探求する心を持ってほしい、そう思う今日この頃です。

(佐藤尚毅)